

中 学 校

平 成 7 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

音 楽

東 京 都 教 育 委 員 会

平成7年度

教 育 研 究 員 名 簿 (音 楽)

区 市 町 村 名	学 校 名	氏 名
大 田 区	大田区立東調布中学校	上 野 教 子
世 田 谷 区	世田谷区立桜木中学校	大 賀 優 子
中 野 区	中野区立第十一中学校	小曾戸 恵
板 橋 区	板橋区立高島第三中学校	島 崎 達 朗
練 馬 区	練馬区立三原台中学校	酒 井 千 尋
足 立 区	足立区立第十六中学校	吉 原 ちより
八 王 子 市	八王子市立第五中学校	◎ 近 藤 俊 憲
立 川 市	立川市立立川第二中学校	○ 塚 田 敏 明
日 野 市	日野市立日野第二中学校	田 中 幸 美
羽 村 市	羽村市立羽村第二中学校	川 原 良 成

◎ 世話人 ○ 副世話人

担 当 指 導 部 高 等 学 校 教 育 指 導 課 指 導 主 事 山 下 哲

研究主題

生徒一人一人が、主体的に生き生きと活動するための指導法の工夫

目 次

I	主題設定の理由	2
II	研究の経過	3
III	研究の内容	4
1	生徒一人一人が、主体的に生き生きと活動することの意義	
2	歌唱	
(1)	現状と課題	4
(2)	指導法の工夫	4
3	器楽	
(1)	現状と課題	7
(2)	生徒一人一人が主体的に生き生きと活動することの意義と授業におけるその場面	7
(3)	指導法の工夫	8
4	指導事例1【歌唱1】 生徒に考えさせ判断させる合唱指導 (第一学年)	10
	指導事例2【歌唱2】 名づけられた葉 (第二学年)	13
	指導事例3【歌唱3】 豊かな響きで合唱しよう (第一学年選択)	16
	指導事例4【器楽1】 リコーダーを中心とした器楽アンサンブル (第一学年、第二学年)	18
	指導事例5【器楽2】 いろいろな楽器によるアンサンブル (第一学年、第二学年選択)	21
5	資料	23
IV	まとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由

ここ数年のマスメディアの急速な発達 は中学生をとりまく音楽環境を大きく変えてきた。身近に音楽が満ちあふれ、彼らは多様なジャンルの音楽を容易に手に入れ楽しむことができるようになった。また、時を同じくして発達したコンピュータを利用して、ごく簡単に作曲したり演奏することも可能である。こうしたことが、彼らと音楽との関わり方に大きな変化をもたらしていると考えられる。

今日の中学生は、耳なじみの良い音楽には強い興味を示すが飽きやすい。目先を変えて次々と興味を移すが、本当の感情をなかなか出さない。校内の合唱コンクールなどでは大いに積極性を見せる一方、音楽の本質と関係のない賞など、結果にこだわる傾向がある。これらは、本年度の教育研究員の一致した今日の中学生の姿である。

これまで、中学校における音楽教育は、音楽の表現や鑑賞を通して、音楽的な知識技能を身につけるとともに、多感な時期を迎えている彼らの心に働きかけ、自らの心の動きに気づかせ感動として自覚させて、心豊かな人間へと成長させることを目標としてきた。

この原点に立ち戻り、今年度の研究員一同は、

- 1 感覚が鋭敏になる中学生には、耳なじみの良い表面的な音楽ではなく、さらに踏み込んで、彼らの感動に直接訴える音楽に触れさせたい。
- 2 自ら進んで「本物の音楽」を選び取る見識を養うことにより、生涯音楽を愛好し続ける基礎的な力を身に付けさせたいと考えた。

近年、一人一人の個性を尊重する学習指導要領の考え方が定着し、音楽科においてもさまざまな指導方法の工夫改善が試みられている。しかし、授業では、生徒たちに良い音楽を体験させるために、表現させる（演奏させる）指導が依然として授業の中心を占めており、工夫改善の余地を大に残していると考えられる。特に中学校では、合唱や器楽合奏が授業の中心であり、これまで大きな成果をあげてきた。たしかに表現活動は効果的であるが、次のような問題があるという点で意見が一致した。

- 1 歌ったり演奏する（表現する）こと自体が目標となりがちである。
- 2 表現のための知識・技術の伝達に終始しやすい。
- 3 教師主導型の一斉指導になりやすく、授業形態や指導法の工夫が不足がちである。
- 4 練習に多くの時間がかかり、他領域とのバランスに問題がある。

今年度の教育研究員一同は、中学校音楽科の授業において、表現活動が基本であることは認めながらも、より一層の工夫改善の必要を痛感した。また、生徒たちが表現するための知識や技能を身に付けることが、本来の音楽の授業の目的であるという考えに対しても、疑問を持つに至った。また、教師主導型の授業を改め、生徒一人一人が生き生きと活動できる授業こそが真に一人一人を大切にできる授業であると考えた。そこで、一人一人の生徒を生き生きと活動させる指導の工夫をすることで、表現活動のもつ問題点がある程度解決できるのではないかと考えた。その結果、表現領域（歌唱、器楽）に絞って、指導法の工夫を中心に、「生徒一人一人が、主体的に生き生きと活動するための指導法と工夫」という研究主題を設定した。

Ⅱ 研究の経過

本年度の研究員総会後、月例会において各学校の実状について意見交換し合い、それに基づき研究主題を設定した。

【5月】

各学校からの報告に基づき、現状と課題について討議した結果、生徒に主体的な活動をさせることを研究主題の中心に置くことで意見が一致した。また、研究に当たっては、表現領域である歌唱と器楽に絞り研究を進めることを確認した。

【6月】

前回の確認を受け、「歌唱と器楽を中心とし、生徒が主体的に活動するための指導法の工夫」という研究主題を設定することで意見が一致した。さらに、研究員が歌唱と器楽のグループに分かれて、この主題にどう取り組んでいくか、中学校音楽科の目標を踏まえ、方向性を協議した。そのためのアンケート調査を実施した。

【7月】

研究主題に沿って作成したアンケートの結果を持ち寄り、検討した。また、各研究員の作成する年間指導計画とその中の任意の1時間の学習指導案の検討を行い、次の研究方針を確認した。

- (1) 各学校から出された指導上の問題点、生徒の現状から研究をスタートさせる。
- (2) 歌唱指導と器楽指導上の基本的な問題を検討する。
- (3) 指導の工夫を具体化するとともに、視聴覚機器等の活用を図る。
- (4) 学習指導要領に基づいた研究であることを確認する。

【8月・御岳集会】

各研究員の持ち寄った年間指導計画と1時間の学習指導案、及び各学校からの報告やアンケートの結果を踏まえ、検討を加えた。特に、「生徒が主体的に活動する」とは具体的にどのような姿なのか意見交換された。また、生徒の現状の背景である社会的問題などについてもさらに深く検討がなされた。その結果、指導法を工夫する具体的な場面を明確にすることができた。

【9月】

8月の御岳集会の成果をもとに、指導法の工夫の具体化に向け協議を深めた。報告書の作成を念頭に置き、どのようにまとめるか協議を進めた。

【10月】 【11月】

報告書の執筆に向け、これまでの研究の成果をまとめる作業に入った。執筆の分担や、まとめかたの方法など具体的に協議した。また、本研究の趣旨を充分反映した指導事例の作成に向け協議を深めた。

以上のように、本年度の研究員は表現領域における生徒一人一人の主体的な活動を重視し、目標達成のためにはどのように指導内容、方法を工夫改善すべきか、より具体的かつ効果的な方策を追求した。また、研究授業の概略の検討や役割分担など発表会に向けての準備を開始した。

Ⅲ 研究の内容

研究に当たっては各学校の現状を理解し合い、十分な検討を加えて問題点を明確にすることが必要であると認識し、極力意見交換を深めるよう努めた。また、各学校の地域性、学校規模、入学してくる生徒の出身小学校との関連、研究員の経験年数等、さまざま異なった条件がある中で共通の課題を精選し、指導の工夫点を拾い出した。

1 歌唱

(1) 現状と課題

歌唱においては各学校から様々な報告がなされた。以下はその内容である。

ア 現状

- ・自主的な活動をする意欲に乏しい。
- ・合唱コンクールなどの行事には積極的に取り組むが、勝ち負けにこだわり、音楽の本質に触れる機会が少ない。
- ・声を出すことに男子は消極的である。
- ・女子は声が細い傾向がある。
- ・生徒が興味、関心をもつ教材選びに苦心している。
- ・パート分けの基準がなかなかはっきりしない。
- ・時間的制約から、音を取り、一通り歌って終わりという場合が多い。そのため音楽をより深く掘り下げることが難しい。
- ・教師主導型の授業になりがちである。
- ・パートリーダーの育成が難しい。

イ 課題

- ・生徒の変化を的確にとらえ、意欲や主体性を引き出せる工夫。
- ・生徒のやる気を起こさせる教材選び。
- ・主体的に活動させていくための方法とリーダーの育成。

(2) 生徒一人一人が主体的に生き生きと活動することの意義

私たちは、与えられた課題について意図を感じとり、達成に至る過程と自己の果たす役割について想像し、結果が価値あるものと判断した時に、積極的に取り組む姿勢が生まれ充実感を得ることができると考える。また、このことが生徒一人一人が主体的に生き生きと活動するための原動力となり、楽しさや感動、向上心が生まれる。こうして、自ら工夫しようしたり、協力する喜びや思いやりなど人間性に直接関わる情操の育成が図られると考える。この結果、生涯学び続ける自己教育力に結び付き最終的に自ら創り出す音が生徒一人一人の人生をより豊かなものにする出発点としての重要な意味をもつと考える。また、生徒一人一人が主体的に生き生きと活動するには、教師の一人一人を見る目が大変大切になってくる。こうした目を養うことが音楽の教師に不可欠であり、生徒の良い点を伸ばしていこうという、これからの評価に目を向けることとなり、音楽科の教員にとっても意義深いものであると考える。

(3) 指導法の工夫

ア 雰囲気づくり

- ・環境を整え、教室に入ると心が安らぐような配慮をしたり、CDを流したりして、意欲的に歌おうという気持ちが持てるような言葉かけの工夫や発問の工夫をする。
- ・教師と生徒の関係や生徒相互の人間関係を大切にしていけるために次のような点に留意する。
- ・チャイム着席で授業が始められるように習慣づける。
- ・座席はパートごとに座り、その場ですぐ合唱ができるようにする。
- ・パートの中心にパートリーダーの席を配置する。
- ・音楽係に忘れ物の点検などをさせて、自主的な活動をさせる。

イ 発声指導の工夫

- ・発声練習用の短い楽曲や、既習曲の一部を使用して練習するなど工夫する。
- ・合唱などの範唱ビデオやLDと自分たちの演奏の記録と聴き比べ、姿勢や口の開け方、響きなどについて気づいたことを話し合ったり発表して、次の練習に役立てる。
- ・音域確認カードを工夫し、自分の声がよく響く音域に色を塗らせるなどして、自分の声の音域について意識させる。また、男子生徒は年度始めに実施したものと比較することにより、自分の音域の変化を知ることができる。

ウ 授業形態の工夫

- ・パートリーダーがまとめやすいように座席の位置を工夫する。
- ・パートリーダーが音取りのうまく行かない生徒を補助しやすいように、そばに座るなどして座席の位置を工夫する。
- ・音取りの進んだ生徒が、完全でない生徒を補助するなど組み合わせを工夫する。

エ 表現を深めるための工夫

- ・アレンジされている教材をオリジナル編成の演奏と聴き比べ、効果の違いについて知る。
- ・指定されたテンポ以外のさまざまなテンポで演奏して、受ける印象の違いについて知る。また、その教材にふさわしいテンポのあることを、歌詞などから受ける印象と合わせ話し合うなどして、表現を深めていく手がかりとする。
- ・さまざまな調性で演奏することにより、調性の持つ音色や効果、受ける印象の違いについて考えさせる。
- ・練習の際、段落ごとに区切り、それぞれの部分を、歌詞の内容と旋律の動きを照らし合わせながら、どのように工夫して演奏したらよいか考えさせる。また、工夫点をカードに記録するなどして具体的な表現につなげる。
- ・無伴奏で演奏することで、自分のパートの音や全体の響きを意識させるとともに、ハーモニー感を育成する。
- ・音楽室を離れ、廊下や階段の踊り場など、校内の響きの豊かな場所を生徒たちに探させるなどして歌わせるなど工夫する。
- ・歌詞は同じで、異なる作曲者による作品を聴き比べ、受ける印象の違いと表現の多様性について知る。

- ・速度記号や発想記号など、さまざまな記号について表現方法を工夫する。例えば、リタルダンドやフェルマータなどについてどの程度表現するのが適当か話合わせるなどして、さまざま試み検討する。

オ 選曲の工夫

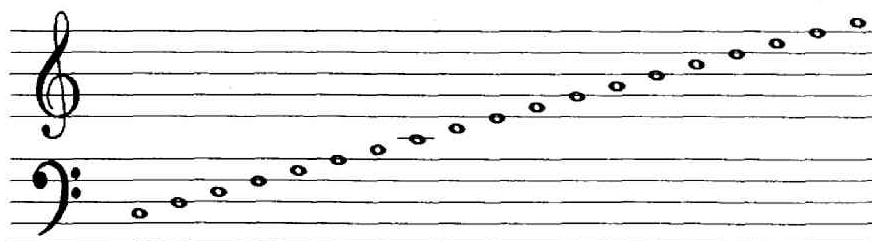
- ・変声期の生徒に配慮する。
- ・男子に女子のパートを歌わせるなど、柔軟に対処する。
- ・無伴奏の教材を適宜取り扱う。
- ・中学校3年間を見通し、発展的、系統的な選曲を行う。
- ・リズムカルな教材や旋律の要素の強い教材など、指導のねらいに即した選曲を心がける。
- ・合唱コンクールの際は、クラスの雰囲気を生かせるような選曲をする。

カ 評価の工夫

- ・観点を明確にしたカードを工夫し、生徒に相互評価させる。その際、できるだけ良い点をみつけるよう指導する。
- ・練習の課程や発表会の反省について、生徒一人一人に記録させる評価カードを工夫する。
- ・グループによる発表の機会を作り、相互評価しやすいような形態を工夫する。
- ・教師が評価する際、できるだけ一人一人の生徒を観察し、音楽的成長にとどまらず、意欲や態度、興味関心など総合的に評価する。
- ・歌のテストの際は、できるだけ個人指導する機会を作り、課題意識を与えたり、励ますなどして、生徒一人一人の実態にあった指導をする。その際、個人指導記録（歌唱のカルテ）のようなものを工夫するなどすると、縦断的な指導資料となる。

音 域 チ ェ ッ ク カ ー ド H. 月 日

- ・姿勢や口のあけ方に注意しよう。
- ・のどに力が入らないようにしよう。
- ・響きに注意しよう。
- ・教室のすみずみまで響いた音域に色をぬろう。



年 組 ()

2 器楽

(1) 現状と課題

中学校の授業で扱う楽器には、弦楽器、管楽器、打楽器、鍵盤楽器、電子楽器、和楽器、民族楽器などであるが、現在の授業では、ソプラノ、アルトリコーダーが主流である。リコーダーには、音色が美しい、音が比較的出しやすい、価格的に手に入れやすいなどのメリットがある。このことは器楽指導において大切なことである。

しかし一方では、曲を表現する以前に運指でつまずいたり、音量がそれほど大きくなく音色も柔らかいので、教師が適切な指導を行わないと生徒にとっては「地味でおもしろくない楽器」になってしまう心配がある。

教師は、楽器の魅力や表現力の可能性を十分に理解し、生徒たちに伝えていくことが重要である。リコーダーを指導する場合、まず教える側がその活躍した時代の音楽を知り、演奏を聴き、音色の奥の深さや表現の豊かさを認識する必要がある。そのことによって、生徒たちはリコーダーの持つ音楽史的な価値をしっかりと受け止め、表現力の素晴らしさに気付き、興味を深め、自主的に演奏に取り組み、名曲に挑むきっかけにもなっていくのではないと思われる。

また、器楽指導においては様々な楽器を使つての展開が可能である。特にギターや打楽器は生徒が興味を示し熱心に取り組む傾向がある。学校行事に合わせてリコーダー以外の楽器も積極的に取り入れる工夫が必要である。

(2) 生徒一人一人が生き生きと活動することの意義と授業におけるその場面

器楽における活動では、一人一人が楽器に触れて音を出し楽しむので、生徒が主体的に活動できる様々な状況が考えられる。まず、練習を通して技能の向上、さらに曲の完成を通じて成就感を得ることができる。そしてそれが、自信や喜び、進んで活動しようとする意欲につながっていく。楽器演奏を通じて、音を楽しみ自己表現していくことは、生涯楽器に親しみ、音楽を愛好する心情を育てるために役立っていくと思われる。

授業の中では、まず個人で演奏する場合、教師の助言や評価の工夫などにより、一人一人がその能力に応じて取り組むことができる。また、合奏をする場合は、各自が自分のパートを演奏することにより、皆で一つの音楽をつくり上げていくことができる。

演奏できるまでの課程においては、

- ア 導入では、新しいことに気付いたり、美しさや楽しさを感じたりし、そこから楽器に対する興味・関心が生まれ意欲につながる。
- イ 練習の段階では、自分が徐々にできるようになっていく楽しさを味わい、自分の課題に一生懸命に取り組む。また、他のパートと合わせることでよりそのおもしろさや難しさを感じ、お互いに聴き合い、助け合い、工夫をする。自分の存在感も感じられる。
- ウ 仕上げの段階になると、自分が演奏できるようになったという満足感・成就感を味わう。他の生徒の演奏を聴くことにより新たな刺激を受け、より一層意欲的に取り組める。このように、楽器演奏では、すべての段階において一人一人が生き生きと活動することが十分可能である。

(3) 指導法の工夫

ア 導入の工夫

- ・共有の楽器は清潔にきちんと収納しておき、楽器の扱い方の約束事を徹底しておく。共有の楽器でも抵抗なく使用できるように1年次より指導する。
- ・本時の目標を明確に示す。グループ練習を行う時は進め方を確認しておく。また教師自身の姿勢として、話を聞かせる、合奏をするなど、今何をする時なのかをしっかりと捉え、生徒にわかりやすく説明していくことも必要である。
- ・授業の最初に必ず姿勢や呼吸に気を付けさせ、ロングトーンや簡単なハーモニーの練習をするなど、ある程度同じ流れで全員でできることから入り、お互いの音を聴き合い教室の中に美しい音色が響くようにする。
- ・生徒は、その時の体調、気分、時間帯などによって授業に対する姿勢がかなり違う。教師は常に明るく音楽を楽しもうという気持ちで授業をすすめることで、生徒に前向きな気持ちをもたせることが望まれる。

イ 楽器の表現力、可能性を伝える工夫

- ・リコーダーの場合、木製の楽器を見せて実際に本物の響きをタンギングや息の強さ、口の形を変えたりして演奏してみせ、多様な奏法音色の違い等に気付くような発問をする。必要に応じてCD、LDなどソフトを利用する。
- ・独奏、重奏、伴奏付きのもの、組み合わせの違うもの等を聴かせる。この楽器は本来こういう表現力があり、自分のもっている楽器でも努力次第でこれだけの音が出せると感じさせたり、その楽器に対して興味をもたせたりするように工夫する。

ウ グループ編成（アンサンブルの組み方、楽器分担）の工夫

- ・クラスの生活班をそのまま使う。
クラスの生活班を使うことにより、クラスで培った人間関係をそのまま生かし、スムーズに楽しく練習することができる。
- ・グループ分けを自由にし、気の合う友達同士で編成する。
自由にすることにより、より一層協力して練習することが可能である。音楽的にできるグループは、難しい曲なども協力して仕上げることができる。
- ・クラス全員に楽器を割り振ってからグループを編成する。
それぞれの楽器の人数を指定した上で自分の得意な楽器を選択させ、それからグループを希望等で編成する。その際音楽的な技能の高い生徒にはできるだけ難しいパートを選ぶようにさせる。自分の興味のある楽器を選択した生徒は意欲的に取り組むことができ、グループ内で手が手な生徒に教えるなどが可能である。
- ・能力が均等になるように教師が編成する。
あらかじめテスト等でその生徒の能力や適性を把握し、担任とも相談して編成することが必要な場合もある。その時は、どのグループもお互い教え合ったり励まし合ったりできるようになる。

エ 選曲の工夫

- ・教師が選曲する場合

身に付けさせたいことを明確にして、その時の目標や各段階に応じたものを選ぶ。また、生徒の演奏能力を踏まえ演奏効果の上がるものを選ぶ。親しみやすくよく知られている旋律を選んだり、逆に、ときには生徒が自ら触れることが少ない曲も紹介する。

- ・生徒が選曲する場合（アンサンブルとして）

あらかじめ何曲か用意しておき、その中から選択させる。その際に難しい旋律は簡単にしたり無理のない音域にアレンジすることも必要である。1曲または2～3曲の中からグループごとに選曲させる場合には、クラス全員でそれらの曲を練習して曲の雰囲気をつかませる。その上で選ばせることにより、グループでの練習をより意欲的に取り組ませることができる。また、逆に演奏したい曲を持ってこさせ、楽器にふさわしいか音域はどうか、技術的に可能かなど、一緒に検討するのも良い。このように自分達の好みの曲を演奏できることで、より関心が増し、生き生きと活動を進めることができる。

オ 練習形態（個人・グループ・全体）の工夫

- ・全体練習

主に基礎的なことの徹底、曲の全体像の把握、各自の課題の確認、全体の響きの味わい等が目的となる。その際、全体のテンポをはっきり示すことが大切である。また、リコーダーの場合ピアノ伴奏も効果的であるが、無伴奏にすることによって、リコーダーの響きをよく聴かせることが必要である。導入の時期において練習効果を上げるためには、全体練習と個人練習を短い時間で繰り返す必要がある。

- ・グループ練習

一人一人の役割をはっきりさせ、また座席をグループのお互いの音が聴き合えるように配置し、個人の演奏ではなくグループで一つの音楽を作り上げるという意識と協力体制を作る。グループ相互はできるだけ離し、練習時間を設定してそのグループの中で教え合うようにさせ、教師は必要に応じて助言するにとどめる。

- ・個人練習

各自の能力に応じた段階別の目標を設けることによって、一人一人が成就感を味わえるように工夫する。それには一人一人の能力にあった課題や生徒の興味・関心を引き出す課題の設定が求められる。また、つまづきの原因を各自が発見できるように工夫する。

カ 評価の工夫（アンサンブルの発表方法も含む）

- ・練習した曲は、できるだけ発表の機会を作る。音楽の授業内で終わらせても良いが、学年の了解を得て各クラスの優秀グループを学年全体発表会等で発表させる。そして、それぞれのグループの良い面や工夫している点等を全体に紹介したり、お互いに感想を述べさせたりする。

- ・アンサンブルの、発表会の時に共通評価事項（ハーモニー、リズム、音楽性など）を作り、聴いている生徒と教師が審査員となって評価をする。そして、後で発表したりそのグループに知らせることでそのグループの励みになり、また、他の生徒も真剣に聴くようになる。

- ・生徒一人一人の意欲を引き出すためには、結果だけでなく過程を評価することが大切である。その方法の一つとしてカード等を利用するのも効果的である。

3 指導事例

指導事例 1 【歌唱 1】 題材名『生徒に考えさせ、判断させる合唱指導』

第一学年

1 題材設定の理由

生き生きと主体的に活動するためには、生徒自身に考えさせ、判断させながら練習を進める授業の工夫が必要である。合唱の仕上げの段階においては、練習進行の指針をある程度生徒自身の判断にゆだねるために、グループ指導の工夫をした。その結果、まとめあげていく過程を通し、感動と喜びを共有させることができると考え、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) 響きのある声で、元気よく明確な発音で合唱させる。
- (2) 曲想を感じとらせ、ふさわしい表現やテンポを工夫させる。
- (3) 範唱と生徒たちの演奏の録音を比較することで、より質の高い合唱にしていけるためにはどのようなことに気を付ければよいのかを考えさせる。

3 教材

混声三部合唱曲 「夢は大空を駆ける」 館蓬菜作詞 渡部節保作曲
範唱CD 「夢は大空を駆ける」
LD 歌劇 「アイーダ」 ベルディ作曲
ビデオ 昨年度校内合唱コンクール録画

4 指導計画（5時間扱い）

第1次（2時間扱い）

- ・「夢は大空を駆ける」の範唱を聴き、おおまかな曲の感じをつかませる。
- ・パートに分かれ、それぞれパートリーダーを中心に音取りをさせる。

第2次（1時間扱い）

- ・電子オルガンやピアノで旋律を弾きながら、（ソプラノとアルト、アルトと男声、ソプラノと男声）というように、2つのパートを合わせる。最後に混声三部で合唱させる。
- ・ピアノ伴奏と合わせて合唱させる。
- ・パートごとの演奏と合唱を録音する。

第3次（1時間扱い＝本時）

- ・4～5人のグループに分かれ、前時の録音と範唱とを比較し、違いを話し合わせる。
- ・ビデオやLDを視聴し、発声と発音に関しての感想を発表し合う。
- ・歌詞を朗読し、どのようなイメージをもって合唱すればよいかを話し合わせる。

第4次（1時間扱い）

- ・♩=120という速度表示がなされているが、あえて♩=72 ♩=140という速度でも歌ってみて、印象を話し合い、適切な速度について考えさせる。
- ・フェルマータやリタルダンドの箇所をどの程度の表現にするか、何度も歌ってみて決定させる。
- ・曲想にふさわしい表現を工夫しながら、適切なテンポで合唱する。

5 学習指導の展開

(1) 第3次の目標

- ・合唱の基本事項（姿勢・発音・発声）を確認させる。
- ・歌詞の内容や曲想を感じとり、明確なイメージをもたせる。

(2) 展開

指 導 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
・前時の復習 ・グループづくり ・合唱の基本的事項の確認 《発声・発音・姿勢》 ・歌詞や曲想にふさわしい表現を工夫する。	・それぞれのパートの確認をする。 ・伴奏にあわせて合唱する。 ・4～5人のグループに分かれる。 ・前時の録音を聴き、感想や印象、気が付いたことをグループごとに話し合う。 ・範唱CDを聴き、録音テープと比較して、自分たちの演奏とどこが違うのかを考える。 ・昨年度の校内合唱コンクールの録画（特に優勝クラスや上級生の演奏）やオペラのLDを視聴し、口の開け方や姿勢について確認しあう。 ・学級委員（または音楽係）が司会をして、各グループで話し合った内容をまとめる。 ・話し合いででた結論に基づき合唱してみる。 ・歌詞を朗読する。 ・全体を四つに分け、それぞれの部分はどのようなイメージをもって演奏するのがふさわしいか、歌詞と旋律を照らし合わせながら、グループで話し合う。	・正しい音程と正確なリズムがつかめているか。 ・不確かな箇所は取り出して、繰り返し練習させる。 ・同じパートの中でグループをつくらせる。 ・記入用紙を配布する。 ・客観的に自分たちの演奏を振りかえってみて、実際に歌っている時の印象とどのように違っているのかを知る。 ・明確な歌詞の発音や、豊かでよく響く発声について気付かせる。 ・強弱や速度の表現についても注意させる。 ・はっきりと大きな声で明確に発音させるようにする。 ・A—①（みどりのだいちを～そらをみようみあげよう） A—②（ゆめがきぼうが～おおぞらをかけるよ） B—①（つらなるやまなみの～ゆきをみようみあげよう） B—②（ゆめがきぼうが～ひろがるよ）

・全員で合唱する。 ・まとめ	・学級委員が司会をし、各グループの意見をまとめる。 ・話し合いで出た結論をもとに工夫して合唱する。 ・本時学習したことを確認し、さらに合唱を充実させていくことを予告する。	・言葉カード（明るい、楽しい、あたたかい、いきいき、……等約50種）の中よりふさわしいものを選び出す。（複数可）。 ・色紙（20色）の中より、場面に応じた色彩を選択させる。
---	---	---

1年（ ）組（ ）番

1 LD・CD・ビデオを視聴して気が付いたことや学んだことを話し合しましょう。

	気が付いたこと・印象・学んだこと
発 音 口の開け方	
発 声	
姿 勢	
そ の 他	

2 A-①、A-②、B-①、B-②それぞれの部分はどんな感じで演奏したらよいでしょうか。黒板に掲示している言葉カードの中より、場面に適したものを選び出しましょう。またそれぞれの部分は何色をイメージしますか。色紙より選び出さない。

		言葉カード	イメージ色
A-①	みどりのだいちを～そらをみようみあげよう		
A-②	ゆめがきぼうが～おおぞらをかけるよ		
B-①	つらなるやまなみの～ゆきをみようみあげよう		
B-②	ゆめがきぼうが～ひろがるよ		

指導事例 2 【歌唱 2】 題材名「名づけられた葉」 第二学年

1 題材設定理由

「名づけられた葉」は、生徒が生き生きと主体的に歌わせる指導をさせるために、大変適した教材であると考え、本題材で取り扱う。その理由は、①曲想が詩と深く結びついている。②曲を表現する上で、イメージを思い浮かべさせたり、深く掘り下げて考えさせることができる。③詩の内容、言葉を意識して歌わせる指導がしやすい。以上である。

2 指導目標

- (1) 歌詞の内容を理解させ、曲のイメージを感じ取らせる。
- (2) 曲想を理解させ、曲のイメージにふさわしい表現を工夫させる。
- (3) 正確に歌う練習を通じて、自信をもたせる。
- (4) 表現すること、曲を仕上げる喜びを味わわせる。
- (5) 調和のとれた合唱に仕上げる。

3 教材

「名づけられた葉」 新川和江作詞 飯沼信義作曲

参考曲「名づけられた葉」 新川和江作詞 加賀清孝作曲

4 指導計画（6時間扱い）

第1次の指導内容

- ・楽譜を見ながらCDによる範唱鑑賞、詩の音読をし、曲の雰囲気をつかむ。
- ・調、拍子、音符、休符、記号、標語の確認をする。

第2次（2時間扱い）の指導内容

- ・パート練習（パートリーダーを中心に）と部分的なハーモニー練習。
ソプラノと男子、ソプラノとアルト、3つのパートと合わせる練習をする。
- ・拍数（伸ばす音、休符）、記号、標語の理解と表現。

第3次（2時間扱い）の指導内容

- ・詩の内容や曲からイメージを膨らませて、表現する方法の工夫をする。
同じ歌詞の作曲者の違う曲との聴き比べ、イメージ画等を通して自分の表現したいことを確認させる。

第4次の指導内容

- ・まとめの合唱
自分たちの工夫したことを、伸び伸び表現することを目指す。美しい響き、バランスを考える。

5 学習の展開

(1) 第3次の目標

- ① 記号、標語の意味から曲を表現するだけにとどまらず、曲のイメージ、詩の内容を演奏に生かせるように考えさせる。
- ② 表現力を高める努力をさせる。

(2) 学習指導の展開（第3次）

指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
前時の復習による導入	「名づけられた葉」を合唱する。 演奏をテープに録音しておく。	・姿勢等に気を付けて歌えたか。 ・意欲的に伸び伸びと歌えたか。 ・正しい音程で歌えたか。
曲の聴き比べ	同じ詩で作曲された、もう一つの「名づけられた葉」を聴き、曲から受ける印象を自由に発表する。 二つの曲に共通する曲想の部分、異なる曲想の部分について、曲中からあげる。 二人の作曲者が曲を通じて、何を伝えようとしているのか話し合い発表する。	・自分の感じたことをはっきりと発表できたか。 ・他の人の意見も受け入れようとする雰囲気が見られたか。 ・できるだけ多くの意見を取り上げるように配慮する。 ・なぜそのような曲想になっているのかを、詩との関わりの中で考えさせる。 ・同じ思いを伝えるために、違う方法を用いることがあることに気付かせる。 ・作詞者、作曲者の思いを自分のこととして意識し演奏する大切さに、気付かせる。
イメージの具象化	詩の中で最も印象的な部分を絵で表わす。	・曲の流れを考えて、動きのある映像としてとらえるように指導する。動きのある部分は文章で補うようにさせる。
表現の工夫	絵や言葉で表わした部分について表現を工夫する。	・記号や標語がある場合はその裏にある心の動きを考えさせる。 ・記号や標語がついていない部分は、具体的に記号や標語等をあてはめてみる。
合唱での表現	録音したテープを聴いて、表現が十分できているか、工夫できる所はどこかを考える。 詩にそって工夫できる部分を発表する。楽譜にメモをしながら聞く。工夫した部分を実際に合唱する。2つのグループに分け、聴き合う。（表現しやすい部分を取り上げる。）	・うまく表現できている部分については、何が良かったのか具体的に話し評価してやることにより自信を付けさせる。 ・見過ごしている細かい部分については教師が指摘したり、助言したりする。 ・自分が表現したと思っている程、聴く人には伝わらないことに気付かせる。

指 導 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
表現力の向上	曲の初めから表現の練習をする。 区切って練習する。	・何も考えないで歌うより、何かを伝えようとする気持ちを持って歌った時は聴く人に訴えるものがあることに気付かせる。 ・記号や標語だけにとらわれず、一つ一つの言葉の意味を大切に歌うように配慮する。 ・聴く人に伝わるように少しオーバーに表現するように助言する。
まとめ	歌詞を理解し、曲の雰囲気を意識して全曲を合唱する。 演奏を再度録音する。 録音した演奏を聴き、感想を発表する。 最初の録音テープとの比較。 進歩した点、まだ改善すべき点を確認する。	・十分表現できた所、まだ不十分なところを確認させる。 ・表現するためには聴きとる力が不可欠なことを理解させる。

6 生徒一人一人が生き生きと活動するための工夫

生徒は自分が興味をもてること、得意なことをしている時は生き生きと活動している。教科の活動の中にできるだけ多く、個々の生徒が興味をもったり、得意な内容を取り入れることにより一人一人が生き生きと活動する場面を作り出すことが可能になると考えた。

歌うことが苦手でも音楽を聴いてイメージを膨らませたり、絵を描いたりすることは好きな生徒がいる。意見を述べたり、絵を描いたりする作業を通して、楽しく授業に参加できた生徒もいた。最初生徒にとって、イメージを絵で表す作業は難しく、歌詞をそのまま絵で表現しようとしていた。練習が進むにつれて深く詩を読みとる力がつき、次第にイメージも豊かになった。又絵で表すことが困難な表現は文章で補う等工夫が見られるようになった。

このようにして表現するという点でも自分の意志が聴く人に伝わり、感動を与えることができることを知り、喜びと自信につながった。

一人一人が生き生きと活動するためには、教師の姿勢、指導がマンネリにならないよう、常に授業の中に新しい発見や喜びを求め、生徒と共有していくことが大切である。

指導事例3【歌唱3】 題材名「豊かな響きで合唱しよう」 (第三学年選択音楽)

1 題材設定理由

アカペラは、合唱の原点であると言われている。伴奏なしに声のみで歌い合わせることに、より他のパートに注意を払い聴き合ったり、全体の響きに対して鋭敏となって、ハーモニー感を育てるのに役立つからである。そこで、アカペラで歌う混声四部合唱曲を、生徒自ら取り組み、工夫して歌うという主体的な学習活動を通して、より表現力を高める学習をめざして、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) アカペラの混声四部合唱の美しさ、楽しさを味わわせる。
- (2) 美しいハーモニー、豊かな響きによる表現を工夫させる。
- (3) 主体的な音楽活動の仕方を身に付けさせる。

3 教材

「オーラリー」	(混声四部合唱)	安田二郎作詞	プールトン作曲
「いざたて戦人よ」	(混声四部合唱)	藤井泰二郎作詞	グラナハム作曲

4 指導計画(4時間扱い)

第1次(1時間扱い)

- ・ビデオ「天使にラブソングを」からアカペラの合唱を聴かせ、響きの美しさ合唱の楽しさを味わわせ興味をもたせる。
- ・アカペラの意味を知らせる。「オーラリー」の範唱を聴かせ曲の感じをつかませるとともに、アカペラで歌う意欲をもたせる。
- ・パートリーダー中心に、各パートの音取りと、2～3回合唱し録音する。

第2次(2時間扱い)

- ・E・プレスリーが歌った「Love me tender」を聴かせ「オーラリー」の旋律を使っていることを知らせ、この曲について説明する。
- ・グループごとに、発声や発音、歌詞の内容、曲想に気を付けながら、他の声部と調和する合唱表現の工夫を話し合わせる。
- ・グループ練習を行い、発表する。またそれぞれの演奏について感じたことを発表させる。
- ・「いざたて戦人よ」の範唱を聴かせ、「オーラリー」と聴き比べ、曲から受ける印象の違いや楽譜上の違いなどについて理解する。
- ・「オーラリー」「いざたて戦人よ」の表現の工夫を生かし、パート練習、合唱、録音する。

第3次(1時間扱い)

- ・第1次、第2次の録音を聴き、それぞれの曲の表現の工夫した点の成果を聴き比べる。
- ・「オーラリー」「いざたて戦人よ」のアカペラで歌う混声四部合唱の美しさ、楽しさを味わわせ、合唱に対する意欲を高め、美しいハーモニーと豊かな響きで歌わせる。

5 学習指導の展開

第2次(1時間目)の目標

- ・「オーラリー」の曲について知らせ、グループごとに豊かな合唱表現の工夫をさせる。
- ・主体的な合唱活動に取り組ませ、美しいハーモニーで歌えるように努力させる。

展開

指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
発声練習	・「ソーアーオー」「アアアアア」「ラララ…」半音づつ上下する。	・声を出そうとする意欲が見られるか。 ・姿勢、表情、口の開け方などを確認する。
既習曲で発声	・生き生きと歌う。	・主体的に歌おうとしているか。 ・美しい発声で歌うことが出来るか。 ・ハーモニーがよく響いているか。
前時の復習 曲の内容の理解	・「オーラリー」を合唱する。 ・E・プレスリーの「Love me tender」を聴く。 ・「オーラリー」の曲について感じたことを発言させる。 	・音程が正しくとれているか。 ・「オーラリー」の旋律を使っている事に気付いたか。 ・ゆったりとしたハーモニーの変わっていくところを感じとったか。
合唱表現の工夫	・各パート2名づつのグループを作る。 ・グループごとに表現の工夫について話し合わせる。(発声、発音、歌詞の内容、曲想など) ・グループごとに合唱練習をする。	・「恋人に思いをはせて歌われた曲」「別れの歌」であることを知らせる。 ・発声、発音、歌詞の内容、曲想に気を付けて歌うことが出来たか。
グループごとの発表	・グループで工夫した点について発表する。 ・演奏する。	・曲の内容を理解しながら、強弱や表情を意識して表現することが出来たか。
感想の発表	・各グループの発表を鑑賞し、その表現の技能や工夫について感じたことを発表する。	・それぞれのグループの良かった点や工夫すべき点について気付くことが出来たか。
全員で合唱	・「オーラリー」を合唱、録音。	・他の声部を聞いて、ハーモニーを合わせているか。 ・一人一人の生徒が主体的に合唱表現をしているか。 ・本時で学習したことに気を付けて合唱しているか。

事例4【器楽1】 題材名「リコーダーを中心とした器楽アンサンブル、合奏の楽しみ」

第一学年及び第二学年

1 題材設定理由

中学校に入り初めて学習するアルトリコーダーの練習が進につれ、徐々にその技術に差が生じてくる。そのような時でも楽しく器楽の演奏が出来るようにいくつかのパートを設け技術の差を補いながら、楽しくアンサンブルが出来るような工夫が大切である。様々な表現が可能なリコーダーを中心にギターや打楽器等を加え編成を工夫した。また、グループで協力しながら学習し、音楽の美しさ、楽しさを感じ取らせ、主体的にアンサンブルや合奏を行うことをねらい、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) アンサンブルを通じて、生徒一人一人が責任をもって自分のパートを主体的に演奏する気持ちを育てる。
- (2) グループ練習を通じて、協力や励ましの心を養う。
- (3) ハーモニーの美しさ、リズムのおもしろさを感じ取らせる。
- (4) 発表に向けて意欲的に取り組み、演奏の工夫を主体的にできるようにする。

3 指導計画

第1次（5時間扱い）の指導内容

- ・ソプラノリコーダー、アルトリコーダー、バスリコーダー、木琴、鉄琴のパート分けを行う。
- ・曲想を把握し、パート練習、グループ練習を行う。
- ・リーダーを中心に合わせる練習をする。
- ・発表に向けてグループで協力して練習する雰囲気をつくる。

第2次（4時間扱い）の指導内容

- ・グループ編成とリコーダーとギターパートの練習をする。
- ・グループごとに演奏したい曲を選び、使用する楽器とパートを決める。
- ・ハーモニーを感じながら曲想やリズムを工夫させて、グループ練習をさせる。
- ・グループごとにアンサンブルの発表をさせ、最後に全員で合奏する。

4 指導の展開

第1次（3時間目）の指導目標

- ・各自の役割を理解し協力して練習できるようにする。
- ・グループで合わせることを重視し、アンサンブルを完成させる。

第1次の教材 「旅愁」 オードウェイ作曲

この教材は教科書では歌唱教材として扱っているが、親しみやすく、また歌うことによって全体の曲想をつかむことが出来る。主旋律はアルトリコーダー、他にソプラノリコーダー、バスリコーダー、木琴、鉄琴を使ってアンサンブルができるようにした。

展開

指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
本時の目標を知らせる パート練習	各自の練習目標を理解する。 自分のパートを各自練習する。わからないことはグループで協力して教え合うようにする。 パート毎に教師の指示で集まり練習する。	各自が目標をしっかりと理解する為にパート毎に丁寧に説明する。 各パート毎に集めて指導する。他のパートとどの様に合うのか確認させる。 (主旋律を教師が演奏するなどして合わせてみる)
評価の観点 自分のパートの練習に集中しているか。グループ毎に協力して練習しているか。各パートのリズムを理解しているか。		
グループ形態での合奏	グループ毎にリーダーを中心にアンサンブルの練習をする。 譜面台を人数分用意しアンサンブルの形態をしっかりとつくって練習する。	各パートがアンサンブルの中でどのような動きがあるか理解できるように助言する。 演奏の速度を決めさせ、合わせやすいように工夫させる。
評価の観点 グループ毎に協力して練習しているか。リーダーの合図に合わせて一定の速度で合わせることができているかどうか。		
発表に向けての準備	今日の練習の反省会を行い練習カードに記入する。次回の発表会に向けてどのような発表をしていきたいか話し合う。 班で話し合ったことを発表する。	どのような発表をしたらよいかグループ毎に助言する。 意欲的に練習に参加できたか話し合わせる。
評価の観点 グループ毎に協力して話し合いができているか。本時の練習が意欲的であったか。		

練習カードのチェック項目

- ①自分のパートの練習に集中することが出来たか
- ②自分のパートを演奏することができたか
- ③班で合わせることができたか
- ④演奏の工夫を話し合って実際に行うことができたか

各項目について個人、又は班の評価をA B Cの三段階で記入する。

第2次（4時間目）の指導目標

- ・ハーモニーに気をつけて曲想やリズムを工夫したアンサンブルを発表させ、お互いに良いところを確認しながら聴き合わせる。
- ・ルネサンス、バロックの舞曲の楽しさを味わわせる。
- ・全員で合奏することで、アンサンブルとはまた違った力強さや音の厚みを感じさせる。

第2次の教材

「アルマンド」 ジェルベーズ作曲 2分の2拍子

「ダンツ」 ビットマン作曲 2分の2拍子

「メヌエット」 バッハ作曲 4分の3拍子

3曲ともルネサンス、バロックの時代の踊りの曲で、古い曲だがリズムカルで楽しい曲である。また、ハーモニーも感じ取りやすく様々な工夫もしやすい。主旋律はソプラノリコーダー、アルトリコーダー、低音部分をギター、必要に応じてテナーリコーダー、バスリコーダー、タンバリン、トライアングル、オルガン、鉄琴、タムを使用する。

展開

指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
音階練習 グループ練習	ソプラノ、アルトリコーダー、ギター等自分が演奏する楽器の音階練習を全員で行う。 前事の復習をリーダー中心に練習を行う。	打楽器の生徒は、ソプラノまたはアルトリコーダーの練習をさせる。
評価の観点 正確な音程を確認できたか。前時にいろいろと工夫したことが生かされているか。		
アンサンブルの発表	自分たちのグループが工夫した点を発表し、順番にアンサンブルの演奏を行う。聴き手は他のグループの良かった点や工夫していた点に気を付けながら聴く。	発表を自信をもってできるように必要に応じて助言をする。
評価の観点 工夫した演奏を主体的にできたか。また、他のグループの演奏をしっかりと聴くことができたか。		
感想の発表 合奏	他のグループの良かった点、工夫していた点を発表する。 「感想」の内容に気を付けながら3つの曲を全員で合奏する。	発表を聴いて自分を取り入れてみたいことを考えさせる。 打楽器に様々なリズムが出てくるが、力強さを味わうことをねらいそのまま演奏させる。
評価の観点 アンサンブルとは違った響きや音の厚みを感じることができたか。		

事例5【器楽2】 題材名「いろいろな楽器によるアンサンブル、弦楽合奏の指導」

2、3年選択音楽（器楽）

1 題材設定の理由

選択音楽の器楽指導のアンサンブル、合奏の可能性を考えた時、各学校の楽器事情に大きく影響を受けられると思われるが、この事例では、リコーダー、ギター、キーボード、打楽器、マリンバ、アコーディオン等の、多くの学校にあると思われる楽器を使用してのアンサンブルの年間計画と、弦楽器を使用しての合奏の指導計画と指導案を示す。

弦楽器は西洋音楽の中で特に合奏や、アンサンブルにおいて重要な楽器である。オーケストラでは、弦楽器は中心的存在であり、アンサンブルにおいても、弦楽四重奏など多くの作曲家が作品を残している。西洋の音楽を楽器で演奏する場合、その曲の原曲は弦楽器のために書かれた作品が多いのではないかとと思われる。このことから、その弦楽器を演奏し、弦の響きを自分で体験することや、奏法を学ぶことは、生徒にとって大変貴重である。

また選択音楽の器楽は、人数が少ない場合も多く、楽器をそろえることも容易であることから、弦楽器を使用しての指導の可能性が増すのではないかと考え、本題材を設定した。

2 学習目標

- (1) 必修音楽の学習基盤に立ち、その体験や技能を生かし、発展的で豊かな音楽体験をする。
- (2) 未体験の楽器に触れ、基本的な奏法を覚え、演奏を楽しむ。
- (3) 自主的・協力的な態度で根気よく練習し、アンサンブルの楽しさを味わう。
- (4) 弦楽器を演奏することにより、その響きのすばらしさを体験し、弦楽合奏の醍醐味を経験する。

3 年間指導計画（器楽）

学期	指導項目	指導内容	使用楽器
1 学期	リコーダを中心にしたアンサンブル	興味ある楽器の試奏、グループ編成、選曲、演奏発表	リコーダー、ギター、キーボード、打楽器、マリンバ、木琴
2 学期	弦楽器の合奏	弦楽器の合奏での重要性を認識する。 弦楽器の基本的奏法を会得する。 簡単な合奏曲を練習し、弦楽合奏の響きを体験する。	バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス
3 学期	多様な楽器によるアンサンブル	弦楽器を含めていろいろな楽器を生徒自身で選択し、学年の終わりに演奏会を行う。	弦楽器、リコーダー、ギター、キーボード、マリンバ、打楽器等

4 教材

交響曲第9番 4楽章 「歓喜の歌のテーマ」 ベートーベン作曲
オーケストラ導入のためのメソッド（全音出版）

5 指導計画（9時間計画）弦楽合奏の指導

第1次（2時間扱い）・弦楽器の重要性を説明、弦楽器の構え方、弓の持ち方の指導。

・ボーイング、音階練習

第2次（2時間扱い）・ボーイング、音階練習、ユニゾンで弾ける簡単な曲の練習。

第3次（5時間扱い）・ボーイング、音階練習と「歓喜の歌のテーマ」の練習、発表。

6 指導の展開（第8時）

	指導項目	学習内容	指導上の留意点
導入	楽器の準備 ボーイング、音階練習	- 正しい楽器の構え方を指示し、楽器が響くようにしっかり弾く。 - 音程をしっかりとれるよう練習する。 - 指使い、ボーイング等を確認する。 - リズム、旋律を覚える。	- 楽器の構えをチェック。 - 指の押さえる位置の確認。
展開	- 各パートを弾き、要点を説明する。 - 各パートで練習に入る。 - 楽器ごとに準備室に呼び細かく指導する。 - 全体を回りながら、できない生徒に個別指導する。 - 各パートごとにみんなの前で弾く。 - 各パートからできる生徒を選び模範合奏をする。 2つのパートを合わせる。 3つのパートを合わせる。	- 同じパート内で協力して練習する。 - 自分のパート以外のリズムを聴いて覚える。 - 模範合奏を聴き、合奏したときの響きを聴き、合奏における自分のパートの役割を知る。	- パート内のリズムを合わせる。 - ボーイングをパートで合わせる。 - 他のパートのリズムを聴き音程を合わせるようにする。
まとめ	- 合奏をする。 - 片付け	他のパートの動きに注意しながら自分のパートを丁寧に弾くようにする。	

7 弦楽器の指導における有効性

弦楽器の指導は一見大変に思われるが、下記に示す弦楽器の共通性と管楽器の比較を考えると指導しやすい面も多い。

- もう一つの利点としては、リコーダーなどの弦楽器は口に含むもので生徒同士の使い回しは、衛生的でない点もあるが、弦楽器はその心配はない。また管楽器は、音を出す部分が口の中で指導しにくい、弦楽器は指導すべき所がすべて見えていることから、適切なアドバイスを生徒にすることができることは、指導の有利性になると思う。

・＜練習カード＞

IV まとめ

アンサンブルを8人〜11人のグループで行うと、各パートの人数が少ないこともあってか一人一人が責任を持って、自主的に練習する姿勢が多く見られた。比較的高貴な演奏が苦手な生徒が、難しいパートに割り当てられ演奏できなくなることによって、グループの一員として演奏に参加できた喜びが自覚につながったこともあったようである。一方、アンサンブルの影響で授業は一貫授業と連日の行き違えが多いところもあり、生徒の気が散ってしまう場面もある。日頃から授業に対する心を整理しておく必要がある。今回の授業では、まだまだ改善の余地も残ったが、今後とも生徒が楽しく、生き生きと活動できる授業を目指して、教

浜辺の歌 リコーダー練習カード

2年()組()番氏名

1 ①高レ・ソ・シ の指づかいを理解しできるようになった A B C
②8分の5拍子のリズムを理解しリズムによって演奏できた A B C

国

目

悩みを書こう

2 ①高レ・ソ・シ の指づかいを理解しできるようになった A B C
②8分の5拍子のリズムを理解しリズムによって演奏できた A B C
③高レの音をきれいにすることができた A B C
④最後までつづけて演奏することができた A B C

国

目

悩みを書こう

3 ①高レ・ソ・シ の指づかいを理解しできるようになった A B C
②8分の5拍子のリズムを理解しリズムによって演奏できた A B C
③高レの音をきれいにすることができた A B C
④最後までつづけて演奏することができた A B C
⑤強弱などを工夫して曲の雰囲気をつくることができた A B C

国

目

悩みを書こう

テ 運指 A B C
リズム A B C
ス 音色 A B C

感想を書きましょう

ト

Violin

3 3 3 3 2 2 1 1 1 1 0 0 3 3 3 3 2 2 1 1 1 1 0

Viola

3 3 3 3 2 2 1 1 1 1 0 0 3 3 3 3 2 2 1 1 1 1 0

Cello

4 4 4 4 3 3 1 1 1 1 0 0 4 4 4 4 3 3 1 1 1 1 0

Bass

0 0 0 0 4 4 1 1 1 1 0 0 0 0 0 0 4 4 1 1 1 1 0

IV 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本年度の研究員は、次のことを念頭に置き研究を進めることとした。

- (1) 研究員の所属校の授業や生徒の実状などの情報交換を研究の基本とする。
- (2) 情報交換を基に課題を抽出し、課題の背景原因を考察する。
- (3) 仮説を設定する。
- (4) 学習指導要領の理念に立ち返り、研究主題を設定する。

生徒一人一人が自らが進んで良い音楽を求め、理解し、生涯音楽を愛好する基礎的な能力を育成させたいという願いを基に、各学校における現状と課題の検討が行われた。

特に、表現領域の授業において、生徒に主体的にかつ生き生きと表現させることの難しさや悩みとともに、意見交換が進むにつれて、さまざまな指導法の工夫が出された。この結果、表現領域における授業において、生徒一人一人が主体的に生き生きと活動できる場面をいかに作りだすかが本年度の課題として浮かび上がり、研究主題を設定した。

研究は表現領域を中心として進められた。その理由は、合唱や器楽といった中学校の授業の中心である活動が、教師主導の活動になりがちであるという各研究員の意見を受けたことによるものである。また、生徒の動きを把握できることから具体的な指導方法の工夫がしやすいと判断したからである。しかし、鑑賞領域に関する研究は今後の課題として残ることとなった。

生徒一人一人が生き生きと活動することの意義として、

- (1) 主体的に行う表現活動を通して、得られた自信や喜びは授業に対するさらなる意欲へとつながる。
- (2) 合唱やで合奏では、聴き合い、助け合い、工夫し合うことで人間関係を深めるとともに、存在感を養うことが出来る。
- (3) 音を楽しみ、自己を表現するという音楽本来の姿を通して生涯音楽を愛好するための知識、技能、態度を育てることができる。

指導法の工夫については特に、導入、授業形態、環境作り、評価の観点から歌唱と器楽領域について、生徒の発達段階を考慮して、1、2、3年と2年選択、3年選択の5事例とした。

2 今後の課題

生徒一人一人の個性を尊重し、主体的に活動させて行くことが求められている今日、音楽科において一人一人の生徒を、主体的に生き生きと活動させるための指導法の工夫は今後も継続する必要があると考える。そのためには、

- (1) より主体的に活動させるためには、生徒理解を一層進めること。
- (2) 生徒の興味関心を引き起こす教材の開発を一層進めること。
- (3) 教師主導の授業形態を、一人一人の生徒が主体的に感じ、考え、表現できる形態に改めるための工夫を一層押し進めること。
- (4) 結果より過程を重視し、一人一人の生徒の成長過程を、もらさず見取っていく評価方法の工夫を一層進めること。